

まなびや

時代の転換期に福井を通じて日本を見つめた

ウィリアム・エリオット・グリフィス



ウィリアム・エリオット・グリフィス

(一八四三～一九二八)

日下部太郎の留学先のラトガース大学で太郎を指導し、その勉強態度を見て日本人の節度、勤勉さに心を動かされ、日本に興味をも

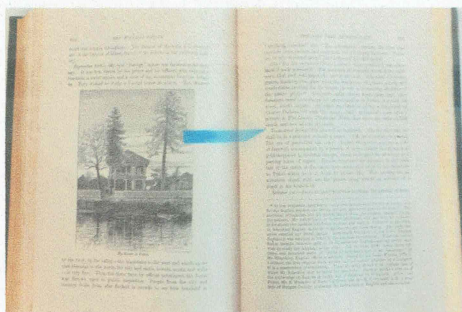
つようになりました。明治4年(一八七二)、グリフィスは福井藩からの招聘に応じ、藩校「明新館」における理化学の教師として来福し、日本で初めて西洋式の理科実験室を作りました、そこで多くの若者を指導し、石塚左玄、今立吐酔など優秀な人材を育てました。

しかし、廃藩置県という歴史的な国内情勢の変化のため、グリフィスはわずか10か月で福井を離れることになりました。当時、中央政府で活躍していた由利公正の勧めもあり、大学南校(後の東京大学)教授となります。帰国後、日本を紹介した『皇国』という本の出版をはじめ、日本の紹介と理解に貢献し、日本研究の第一人者と言われました。『皇国』には福井の思い

出も数多く書かれています。



米国から取り寄せた実験室の器具



『皇国』歴史、地理、民俗、文化等(M9)



グリフィス・日下部像

福井藩最初の海外留学生(福井市出身)

日下部太郎

くさかべ たらう



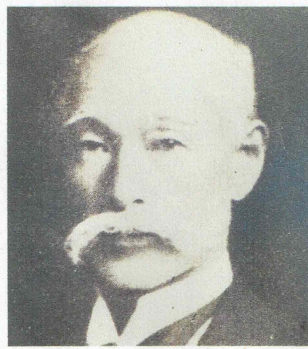
▼日下部太郎(一八四五～一八七〇)は、慶応三年(一八六七)福井藩で初めての海外留学生としてアメリカに渡りました。ニューブランズウィック

の鍵が授与されました。

今立吐酔

いまだて とすい

▼今立吐酔(一八五五～一九三二)鯖江市出身。福井藩校



明新館では、グリフィスに出会い指導を受け、成績優秀でその後伴って上京。大学南校(現東京大学)に入学、明治七年グリフィスの帰国に同行してアメリカ・ペンシルベニア大学に留学しました。帰国後は京都府中学理化学教授、弱冠25歳で初代の京都府中学校長に就任しました。